

2022 年 9 月 11 日（日）「御霊による歩み」

ガラテヤ 5:24-26

24 キリスト・イエスに属する者は、肉を情欲と欲望と共に十字架につけたのです。25 私たちは霊によって生きているのですから、霊によってまた進もうではありませんか。26 思い上がって、互いに挑み合ったり、妬み合ったりするのはやめましょう。

【序論】

光と闇。これは物理的／倫理的、両方の意味で言われることがある言葉です。人間の心の中では、後者の意味で、光と闇が混在しています。善と悪のいずれを選択するかとの戦いが常にあるのです。キリスト者となる前の自分を振り返りますと、善悪の基準が不明瞭なまま、両者が入り混じっているのをぼんやりと認識していたように思います。しかし、聖書のことばによって基準が明確化されたとき、両者の区別がはっきりとし始めました。ただ、それはまだ律法によって判断されているだけの状態であり、光を選択する力はなかったのです。光を選択できるようになるには、光の子とならなくてはなりません。

今日でガラテヤ5章が締めくくられますが、「肉の生き方」と「御霊による生き方」の戦いの総まとめとなります。

【本論】

本論 1. 肉の磔 (24 節)

キリスト・イエスに属する者は、肉を情欲と欲望と共に十字架につけたのです。(5:24)

「肉を十字架につけた」という面白い表現が出てきました。「肉」とは「神の支配から離れた思いと行い」であり、19～21 節では具体的に「淫行、汚れ、放蕩、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、嫉妬、怒り、利己心、分裂、分派、妬み、泥酔、馬鹿騒ぎ」という事柄が述べられていました。これらは、外面に現れてくる肉の行いと理解することができますでしょう。キリスト者はこれらを十字架につけてしまったのだとパウロは言うのです。彼が敢えて「十字架につける」という過激な表現を使っているのを見落としてはなりません。私たちはどうしても先入観によって「十字架」というものを輝かしいものに見立ててしまう傾向がありますが、第一世紀のギリシャ・ローマ世界においては、言葉にするのも憚られるほどに恐ろしい処刑でしかありませんでした。これ以上ないほどの苦しみをもって人間を虐殺する手段、

まさしく拷問死であります。私は職業的知識として、歴史上どんな死刑が考案されてきたのかを調べなくてはならないことがあります、どれも身の毛がよだつものばかりです。その中でも、十字架刑の恐ろしさはその他多くの処刑の中でも随一と言えるでしょう。少なくとも映像では見たくない。映画でも早送りしたくなる場面です。ここまで人間を苦しめる方法を考える人間の残忍さが怖くなります。それほどの苦しみを伴う処刑がキリストに対してなされた。何とパウロは、それを「肉」に対してやってやろうと言うのです。いや、キリスト者はそれほどの憎しみをもって、自らの内に潜む「肉」を抹殺したのだと言っているのです。

「情欲」「欲望」という二つの用語が出てきましたので、念のため整理しておきたいと思えます。これらは19～21節の「肉の行い」に対し、それらの背後にある心の動きを表している。「情欲」(πάθημα／パセーマ)と訳された言葉は、基本的には「苦難」「不幸」を意味しますが、ここでの文脈では「欲情」と捉えてよいでしょう。「興奮」と訳されているものもあります(佐竹)。「欲望」(ἐπιθυμία／エピスミア)の方は、他に「渴望」「願望」という意味を持つ言葉であり、より積極的に何かを求めていく態度をイメージさせます。これらは、健全な性欲を通り越し、罪と結びついて現れる歪んだ思いです。

おそらくパウロはここで、性的な事柄だけを述べているのではなく、食欲、所有欲、支配欲など、幅広い意味で欲求と罪が結びつく状態を指摘していると思われます。それが教会生活の中で現れるとどういうことになるか。ガラテヤ教会内で実際に何が起きていたかが、26節を読むと分かります。

本論2. 肉の行いの実際 (26 節)

思い上がって、互いに挑み合ったり、妬み合ったりするのはやめましょう。(5:26)

「思い上がる」(κενόδοξος／ケノドクソス)とは、「理由の伴わない栄光」「うぬぼれ」「空っぽの栄光を熱心に求めること」などを意味する言葉で、要するに虚栄心が隣人との関係を壊していくことを表しているでしょう。誰かが自分を実際より大きく見せようとし始めると、「挑み合い」「妬み合い」ということが起きてくるということです。

「挑み合う」(προκαλέω／プロカレオー)とは、挑発することで、自分の優越性を誇示することで隣人をみじめな思いにさせたり、競争心を煽り立てたりすることです。どちらが知識を持っているか、どちらが優れた奉仕をしているかなど、主の御前にはまったく誇ることでできないものです。自分が主の目にどう映っているかのみ集中したい。

「妬み合う」(φθονέω／ファネオー)とは、シンプルに「妬む」ことで、この感情は劣等感から生じることがほとんどでしょう。人と自分を比較するところから生まれるみじめな

思いです。妬まれていることをずっと知らないでいたということもあるかもしれませんが、豊かさや幸せな家庭がいつしか誰かの妬みの原因となっていることもある。いずれにせよ、キリスト者はこのような囚われから解放されたはずなのです。その人が神の子としての豊かさを持っているなら、この世のものでどっちが多いか少ないかで競い合う必要などありません。人のことばかりが見えているとき、私たちは神が見えていないのかもしれない。神に集中して生きるとき、私たちは人を見て妬んでいることなどできなくなるはずです。

本論 3. 御霊による生き方 (25 節)

順序は逆になりましたが、最後に 25 節に戻しましょう。

私たちは霊によって生きているのですから、霊によってまた進もうではありませんか。(5:25)これが結論です。「肉の生き方」を捨てることに躍起になると、かえってそれに囚われていってしまうかもしれません。むしろ、光を見て歩むことが大切です。自分は御霊によって生きている存在であり、御霊によって歩んでいることをいつも思い起こす必要があります。

御霊による生き方とは、キリストにある自由が生活の隅々にまで行き渡った歩み。罪や律法に縛られるところから解放された「光の子」としての人生です。そこにはまことの自由がある。御霊による生き方が結んでいく実は、22 節で学んだ通り、「**愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制**」のようなものです。これらが外面に現れる生き方であるとするならば、私たちの内側では何が起きているのでしょうか。それは、神との愛の交わり、聖霊の内在、罪の赦しです。これらが私たちの心で力強く働いているとき、「肉の思い／行い」は活動する余地をなくしてしまうのです。

私たちが隣人との関わりにおいて御霊の実を結んでいくには、私たちの中での神との交わりがなくてはなりません。しかしながら、この御霊の実は人との関わりなくしては具体的に宿っていかないのです。両者は相互補完的な関係にあり、相乗的に増し加わっていく性質を持っている。主イエスの教えに立ち返りましょう。

そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。「先生、律法の中で、どの戒めが最も重要でしょうか。」イエスは言われた。『心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の戒めである。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つの戒めに、律法全体と預言者とが、かかっているのだ。」(マタイ 22:35-40)

愛することは、とりわけ人を赦すというところにおいて現れるものであり、また大切な家族が肉体に重い刺を負ったとき如何に支えるかというところで問われてくるものであります。そのとき、私たちは自分が握り締めていた何かを手放さなくてはならなくなるかもしれ

れません。誰かのために何かを手放す。実は、そこにこそ主イエスが下さった自由があるのです。なぜなら、主イエスこそ私たちのために自らのいのちを捨ててくださった方だからです。

【結論】

キリスト者の内側では、常に御霊による新しい生き方と肉による古い生き方との戦いがあります。光と闇がぶつかり合い、どちらを選択すべきかが問われている。この戦いが存在することは否定することができず、自分の内に罪と結びつきやすい欲が存在することも十分に認識する必要があります。へりくだって御霊の守りと助けを祈り求め、隣人を裁かず、主と自分との関係に集中して歩んでいけばよいのです。そのような歩みを人生の終わりまで続けていきたいと思います。

【祈り】

光なる主よ。私たちをも光の内に入れてくださったことを感謝いたします。しかし、心の中には生来の闇が依然として生き残っており、光なるキリストの支配を妨げようとしています。この戦いに勝利をもたらしてくださるのは、聖霊の働きにほかなりません。どうぞ、新しく始まった神の国に属する人生を最後まで歩み抜かせてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
光そのものにして、罪人を闇より引き揚げ給う、父なる神の愛、
尊いいのちを惜しみなく与え、まことの自由に生きる道を示し給うた、主イエス・キリストの恵み、
神との関係にこそ集中させ、柔軟に肉の戦いに勝利を得させ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。